

出演団体・垣澤社中さんの公演感想

はじめに

これまで、第九回公演にご来場された方々からご感想をいただき、実行委員会のウェブ（註01）に発表してまいりました。続いて、「出演者の声」をお知らせします。「出演者の声」をしっかりと文字化するために、出演者サイドにアンケートをお願いしました。そのことにより、第九回公演にご出演された垣澤社中の声を残すことができました。「神楽公演に対する評価」を考えていく上で大切な資料だと思います。演じ手側の事前取り組みの状況など改めて私たちは受け取ることができました。

私たちが主催してきた神楽公演の再価値化を図っていくには、公演後の活動がとても大事。幸いなことに、高度に編集された公演動画「DVDセット」が出演者に渡っています。そのことにより、それぞれが自ら演じた神楽を見直されたと思います。再帰的な語りを演じ手からいただくことができました。

公演を企画し、主催する実行委員会にご協賛をいただいた各社、各位を十分に意識して、公演成果を内外に強調する、そんなベクトルを宿痾のように抱え込んでいます。それはそれとして、出演側の感想をここで公開させていただくことで、神楽公演を考える新しい糸口にしたいと思っています。なお、年が明けてからの作業だったため、四月に入ってからアップとなりました。

（1） 2016年9月9日のスケジュール

第九回公演のタイムスケジュールは以下の通りでした。

【昼公演】

- 13:30~14:00 寿式三番叟（30分）
- 14:00~14:10 幕間（10分）
- 14:10~14:30 神楽解説（20分）
- 14:30~14:50 大蛇退治（20分）
- 14:50~15:15 幕間（25分）
- 15:15~16:00 天之磐扉（45分）

【夕公演】

- 17:30~17:45 神前舞（15分）
- 17:45~18:00 幕間（15分）
- 18:00~18:40 紅葉狩（40分）

18:40~19:00 幕間 (20分)

19:00~19:35 根国試練 (35分)

19:35~19:45 幕間 (10分)

19:45~19:55 寿獅子・大黒舞・両面 (10分) 写真一枚

かなりタイトなスケジュール。パンクチュアルな公演をお願いした側としては、本当にすごいお願いをしたな、とあらためて唸っています。

(2) 設問とご回答

設問は、合計で六つです。その内容は、①楽屋ワーク、②劇場公演と時間管理、③新作面芝居について、④新作神楽について、⑤神楽公演で得たもの、失ったもの⑥『公演解説プログラム』と公演 DVD、記録写真についての評価でした。アンケート用紙に記述していただき、さらに、私からの追加質問をお願いしてコンテンツの「確認」と「増量」を目指しました。ご回答された方々の紹介順ですが、原稿が仕上がった順です。なお、六つの設問に対する回答を揃えた後に、筆者なりに感じたことをコメントにしてあります。神楽公演が出演団体に与えてきたご苦労ぶりや影響について、もっと考察すべきだ、あるいは自覚すべきだ、とあらためて考えるようになりました。

アンケート結果のご報告

○【設問01】

演目数が多くて、幕間時間も十分でないスケジュールでした。楽屋のご苦労はどうでしたか。かなり大変だったかなと思っています。お願いした私たちがこのような質問をして申し訳ないですが、楽屋の様子についてご感想をお願いします。

回答01 (垣澤瑞貴さん)

「準備と楽屋が九割で残り一割が舞台」、私が稽古に通っている日舞の玉川師匠から繰り返し言われてきました。これまでは時間の制約があまりない舞台ばかりでしたが、さいたま芸術劇場での公演はそうはいかなかったもので、これほど師匠の言葉が響いたことはありませんでした。よい裏方がいること、これが舞台の成功に大いに関係するのです。今後は裏方ができる仲間が育つことが大事だと思いました。また、自分が裏方に回れるくらい、多くの神楽仲間を作り、回していく方法も考えないといけない、そう思いました。

回答02 (加藤美津枝さん)

学生スタッフさん、ありがとうございました。私は、舞台小道具の担当もし

ていました。まずは、一緒に小道具の出し入れをしてくださった東海大学の学生スタッフさん方にお礼を述べさせていただきます。本当によく動いてくださいました。ありがとうございました。私のつたない説明をしっかりと聞いてくださり、舞台に落ちがないようにと、大変熱心に取り組んでくださる姿に感動でした。終演を迎えたときに、一言お礼を言いたかったのですが、その余裕がなく失礼してしまいました。すみません！

それから多加美社中（東京）の皆さん、小西浅美さん、ありがとうございました。舞台での小道具の出し入れが終わり、「衣装をたたまなくちゃ」と楽屋に行くと、もう、すっかり片付いていて、私のやることはありませんでした。

事前の厚木での全体稽古のときは、舞台準備に加え、着付け、片付けと、それこそ目の回る忙しさでした。加えて、着付けの仕方に自信のない私は「こんなことで…」と、とても心配でした。でも多加美社中の代表である高見師匠と坂本舞さん、瑞貴さんの日本舞踊の兄弟弟子であります小西浅美さんのお陰で楽屋は円滑に回っていたように思います。「多加美社中と小西さんのご協力がなかったら」と思うと、今でもゾッとします！衣装の管理の重要性を改めて感じました。いつも衣装の準備をされている、お家元や瑞貴さんにとっては、「あたりまえ」のことかも知れませんが、昼公演と夕公演別に衣装ケースを分けたり衣装を演目ごとにまとめてあったので、とても分かりやすかったです。写真入りファイルをありがとうございました。

あのファイルのお陰で、各自が付ける衣装や面が、とても分かりやすかったです。あのファイルを頂いたとき、「すごーい」「こんな大変な作業をありがとうございます」という気持ちでいっぱいでした。小道具を舞台に並べる時も、あのファイルの写真がとても役立ちました。

回答03（塩川一美さん）

昨年の始めの頃から着付けの稽古を基本から繰り返しました。覚えが悪い年齢になったので、苦労の連続でした。昨年、さいたま公演の予定について、話がありました。明治神宮での記念公演の折、舞台までの長い距離を着付けして歩いていたとき、私を含め何人かが着崩れを経験して、ショックを受けました。

以後、さいたま公演に向けて衣裳の本格的な着付けの必要性を痛感、瑞貴さんの指導のもと、何度も同じ事を繰り返し身に付いた？と思います。着崩れしないと演者の気持ちが引き締まることを、演じて知りました。老骨に鞭打ったことは無駄でなかったです。

今回のさいたま公演では、多加美社中の代表である高見師匠と坂本舞さん、そして、瑞貴さんの日本舞踊の兄弟弟子小西浅美さんが着付けのお手伝いとなり、大いに助けられました。安心して次の支度が出来、心の余裕もありました。

楽屋での円滑な時間短縮にと貢献できたと思います。多加美社中の皆さん、小西さん。本当にありがとうございました。

回答04（信太達也さん）

着付け係を増員することで楽屋と支度がうまく回るように考えました。誰がどの役で、どの衣装を使うかのファイルを作成し一目瞭然にしました。事前準備としては道具類、装束に使う演目や場面、使う人を書き込んだ紙を養生テープで貼りました。全員が情報を共有してのぞみました。楽屋では前の演目と次の演目の物が混じらないように分けし、行ったり来たりがない動線を意識し、小道具その他を配置しました。結果、無駄な動きがなくなり、最小限のやり取りですむため、タイムロスもほぼなくなりました。楽屋について強く意識することは、まったく初めての取り組みでした。

回答05（中山敏男さん）

演目別に、面、衣裳、持ち物等の仕分けがあり、使う人の名前も付いていて大変助かりました。そして、着付けの技術と知識のある方に着せて頂き安心でしたが、楽屋詰めの方は大変な思いをされたことでしょうか。ありがとうございました。幕間については、普段、神社での公演では一つの演目が終わると地元の太鼓連の方がすぐ叩き始め、終わるとすぐ神楽が始まる。神楽の幕間があっても神社の境内全体の幕間はありません。全体の幕間があり、又、長いと帰ってしまう客も出てきます。

劇場公演では途中で帰ってしまう人は、急用でない限りないと思いますが、幕間の空白時間、何か流すか何か演じるとか、そして、ナレーションが終わると、すぐに次の演目が始まるように構成されていて、とても良かったと思います。

回答06（石渡 勇さん）

事前下見は初の会場だったので、やっておいて良かったです。大規模な神楽公演はチームワークが必要で、それがよく出来ていました。本番時の各人の衣裳小道具の整理については、良くできていました。会場の照明が暗くなるとムードが変わり良かった。着付け、片付けなど裏方さんが大変だったと思います。いい舞台になったのは、大勢のスタッフのお陰だと思っています。

回答07（臼井良子さん）

今回は演目も多く、家元の方での準備が大変だったと思います。しかし、計画的にそれぞれ身に付ける衣裳、面、採り物は写真にして頂き、夏の稽古時には実際に身につけてやってみたので安心でした。

回答08（垣澤 勉さん）

幕間時間が短いので大変だったのは事実です。この日のためにかなり前から着付けのお稽古をしてきましたが不安もありました。従って、当日は、神楽を継承している多加美社中さんの元締・高見 進様と坂本 舞様や着付け専門の小西浅美様にお願いしました。更に、舞台に出演する人数も最低限に絞り、舞台に上がらない人は、着付け役に回り対応しました。そして、司会者や幕間のイベントなど、スタッフの方々のご努力もあり、大きな遅延もなくスムーズに舞台進行が出来たと思っています。関係各位様に心より感謝申し上げます。今後の活動に際しては、面と役柄の関係、衣裳と役柄との関係、採り物（注連飾りの作成、奉幣の作成、その他）などの言い伝え、そのための準備作業を整理して、伝えたいと思います。また、着付け技術習得を私たちの課題として取り組んでいきたいと思っています。

＊コメント

一団体・昼夕公演を開催している私たちは、あらゆる場面で、出演団体にご負担をかけています。その様子がアンケートからご理解できると思います。演目数が多いので、装束、神楽面を含めて持ち込む量が多くなります。劇場側のご配慮もあって、公演前日の午後3時ぐらいに劇場に搬入できました。楽屋ワークは神楽用具の整理整頓が基本。どんな楽屋（舞台裏を使用）であっても、整理整頓が大切で、順調に着替え（脱いで、着る）を進行させて、神楽面を着けて、採り物を持って舞台の袖までたどり着くのは容易なことではありません。

今回の公演では、楽屋は着付けスタッフが三名。今回の公演の成功は楽屋の仕事がうまくいったから。そのことがご理解いただけるアンケート結果であったと思います。こうした情報は、公演成果として上がってくることはないのですが、神楽伝承者が楽屋の仕事にいかにか腐心したことがご理解いただけると思います。機会があれば、社中がご用意された楽屋ファイルの一部をご覧いただきたいと思っています。舞台図面は、2016年8月27日付けで、「当日の舞台図面」というタイトルで、私どものウェブ（新着情報）にアップされています。

【設問02】

神社での神楽奉納と違って、劇場神楽では時間管理に神経を使うのが実情です。そのあたり、いかがでしたか。

回答01（垣澤瑞貴さん）

タイムスケジュールは、社中にあっては、誰よりもしっかり把握することを心がけて舞台に臨みました。いわゆる台本も全て分刻みで書き込みました。着付けのバリエーションも無駄がないように、徹底的に考えました。江戸の神楽を教えていただいた高見進師匠と坂本舞さん、それに小西浅美さんに裏方の応援を依頼したわけですが、この三名の裏方支援がなければ、舞台成功は困難だったと思っています。時間の意識を持ってもらうことは、なかなか容易ではありませんでしたが最後は、とにかく仲間（座員と言います）に任せようという気持ちで、臨みました。良い経験になりました。公演経験後も、いろいろな場所で神楽を舞っていますが、時間を気かけながら舞台を務めることが習慣となりました。これは、神社での神楽奉納の姿勢とは違ったものです。

回答02（加藤美津枝さん）

もちろんです。一日で、七つもの演目を時間割(笑?)通りにやるなんて、考えただけでも「エー、無理〜」、という感じでした。公演当日は、壁に掲示のタイムスケジュールとにらめっこ！一時も神経が休まらない一日でした。稽古の時も、時間を気にしつつも、やり直しがあったり、変更があったりで、なかなか通しての時間計測が無理なことが多かったように記憶しています。

回答03（塩川一美さん）

神社での奉納神楽では、時間は余り意識しませんでした。始まりの時間などを聞かれることもありましたが、家元や座員の皆さんと気軽に、概ね何分程度という把握でした。

家元から楽屋での打ち合わせ時、時間の短縮の確認や演じる中では、楽屋符牒で「ケンチ」（註02）。早く、早くと、合図があると、その都度、指示を受けて、舞の所作省略をして時間調整していました。

今回のさいたま公演では、進行が遅れないように気を付け、早め早めの着付けをしました。

回答04（信太龍也さん）

楽屋では一人一人の、いわば神楽師別のタイムスケジュールを事前に作成していたので、どこで誰が過密になるのか、そのポイントで理解することができました。それに合わせた着付けの優先後劣順位をつけて行動しました。出演中は、いかに稽古と同じようにできるかを意識しました。時間や歩数など計りながら稽古をして来たので、無駄なアドリブ、はしょりによる時差をなくし、時間内で収めることに注意を払いました。

回答05（中山敏男さん）

自分のレベルではどうする訳にはいきませんでした。

回答06（臼井良子さん）

自分の役は限られていたので、何度も繰り返し稽古してきたので何とかやり通せたと思っています。

回答07（垣澤勉さん）

大きな劇場舞台での有料公演、しかも単独公演。昼夕公演。そうした経験がないため、「時間管理」の意識がこれまでは希薄でした。劇場での有料公演では、特別な理由がない限り、お客様を待たせる事は御法度です。正直この部分はかなりの神経を使いました。

先ず、稽古の最終段階では、時間を意識し稽古をしていましたが、使用する劇場の広さ等の差もあるため、遅れるより早めに終わる様な演技の短縮化を図って対応し、臨みました。

＊コメント

社中の皆様が時間管理を強く意識されて、舞台に臨んだことがよく理解できます。神社での奉納神楽にあっても、当たり前ですが時間を意識されていますが、劇場での神楽公演では過剰なぐらい時間を意識させてしまいました。昼公演、夕公演と二部公演ですから、特に昼公演の時間が押してしまうことを私たちは恐れました。夕公演の来場者を待たせてしまうことがあったからです。ボランティアスタッフは、適当に時間が取れますが、当然のことながら劇場側が手配しているスタッフの休憩、食事時間の確保については、劇場側からの要請が強いので時間管理を私たちも演じ手に強く求める傾向があります。（それでも、相当、忍耐強く劇場側の皆様にはご協力してもらっています。）また、せっかくの公演機会だから多くの演目をご紹介したい、という気持ちもあって毎回、ハードな公演が繰り返されています。

【設問3】

面芝居を演じてもらいました。それも、新作をお願いしました。演じてみて、面芝居の可能性、難しさ、稽古の課題など新たに見つかりましたか。

回答01（垣澤瑞貴さん）

先ず、最初に社中の皆さんへの感謝、この言葉に尽きます。もうしばらくは再演することは叶いませんが、私の我が儘に付き合ってくれた皆さんに頭が下がります。それを踏まえた上で、課題は色々と見つかりました。台詞回しをもっと稽古しないと。特に女性が男性役の台詞を喋るのはもっと稽古が必要です。

それから、出とハケ（神楽師が舞台上に登場するとき、また舞台から離れて言うとき）に役を離れて、普通の人間になっている点、台詞を発していないときに余計な身動きが目立ったこと。公演時間を気にするあまり、動作も台詞も早くなる傾向があったこと。衣装の着付けと所作がマッチングしていないと言う反省、演じ手が十分に役柄をのみこんでいない点など、DVD を見ていると、反省点がたくさん生まれました。やはり「新作面芝居 紅葉狩」はもっと能に近い形でアレンジした方が面白く出来上がったかもしれないです。面芝居は、新神楽として、相模の神楽師が残してくれた、里神楽です。だからこそ、囃子の力も面芝居ではもっと表現力をつけないといけない。強くないといけないです。課題だらけですが、チャレンジして良かったです。面芝居が減りかけた芸ではなく、昔に生きた芸を再現するものでもなくて、面芝居の未来が見えたことは良かったです。

回答02（加藤美津枝さん）

面芝居を演じてみての感想ですが、正直、難しかったです。発声が悪く声が通らなかったこと、衣装(打ち掛け)の扱いが十分に分からなかったこと、登場人物の動きが、つかみきれなかったこと、反省ばかりです。面をつけての発声は、やはり無理があるように思いました。一人一人にピンマイクがついているのなら話は別ですが、お客様も恐らくこもった声は聞きにくいと思います。常に面をつけて稽古する必要があると思いました。そうすれば、発声の仕方や動き方も習得が向上するのではないのでしょうか。

回答03（塩川一美さん）

歌舞伎や人形浄瑠璃で有名な演目なので演じられることにワクワクして楽しかったです。会話（台詞）を交えながらの演技ですので見る人には物語の内容がよく分かり気軽に見て頂いたと思います。分かりやすく面白いので、これからの将来性があると考えます。神楽は仮面黙劇、お囃子によって所作、演技が行われ言葉を発しないので頭の中でイメージを描きながら演技をしていますから、演技に集中できる場所があります。面芝居は、会話（台詞）と動作（所作）の両方同時ですので円滑にするには、まず、台詞を完全にマスターする必要があります。そのように思いました。

回答04（信太龍也さん）

個々のスキルに、より比重が置かれるものだと実感しました。課題としては面を着けた上で、聞き取りやすい声の出し方。面での表情の出し方、所作。会話での間合いの取り方などなど。歌舞伎の真似事として見られがちなものではなく、「面芝居」としての存在価値がどこにあるのか。歌舞伎と同じ演目をする

のであれば、なにが我々の特色なのか、将来性を高めて行く為にも考察を深めて行く必要があると感じています。

回答05（中山敏男さん）

本来の神楽と平行して現代人の好みやテンポに合った内容と子どもでも分かるコミカルなものが出来れば、そんなの邪道だと思う人も出てくるかも知れませんが、先ずは人が見てくれなければ話になりません。

回答06（臼井良子さん）

私自身は、自ら神楽の世界に入り、色々なことを学んできました。仕事をしながら神楽のことをやってきたので、なかなか上達しませんが、活動意欲はあります。新しい演目については、稽古をしながら改善してきましたが時間の制限があるため、やむなくカットせざる事もありました。

神楽は、古事記、日本書紀に書かれたものが元になっている訳ですが、私自身、もっと勉強しなければいけないなと思いました。

話の内容も理解していないのに、お稽古をするだけではいけないと思いました。神楽は一人では出来ず、チームでやるのでひとり一人が努力していくようにしないといけないと思います。中々ついて行けない時もありましたが、神楽の将来は続くと思います。

回答07（垣澤勉さん）

新作の面芝居「紅葉狩」は、既に、里神楽（黙劇）での「紅葉狩」や神代神楽「黄泉醜女」などの公演実績があったため、舞台の流れや演技構成は、それをベースに創作出来たと思います。しかし、公演実績が少ないため、所作以外の台詞回しや発声法が大きな問題となりました。大きな声を出しても面で声が籠もってしまい、聞きづらい面芝居の欠点の改善です。対応策として、能などで行っています面と顔の間に空間を作る工夫を施しましたが基本的な台詞回しや発声法をはじめ、役柄の把握、お囃子の弱さ等、まだまだ課題だらけで反省点が多くありました。

今後、機会を見つけ歌舞伎や能などを鑑賞し、面芝居経験者から経験談をさらに伺うなどの機会を設けて勉強する事が大切だと思いました。また、そういう伝承を学ぼう、という意識が社中の方々に芽生えていくことが大切です。

*コメント

新神楽、あるいは面芝居は垣澤社中で継承されていること自体が奇跡となっています。強く、この面芝居の継承をお願いしているわけですが、新作面芝居

に果敢に挑戦してもらいました。私は、垣澤社中の魂が来場者に間違いなく伝わったと思っています。ただ、面芝居の継承については、神楽社中にあっても揺れていることがアンケート結果を読んで理解できました。家元がこの面芝居（新作でした）の舞台を実現するために、相当の消耗を強いられたと後日に述べておられました。面芝居の現状を知ることができました。

【設問04】

新作神楽をお願いしました。お客さんの反応は、とてもよかったと思いました。垣澤社中の定番になる、と勝手ですが感じています。新作神楽は制作するのも大変、演技手も初の役柄だから、苦労もあったでしょうし、小道具も見慣れない。演出も試行錯誤だったと思います。歌謡曲も挿入したことも含めて、感想をお聞かせください。

回答01（垣澤瑞貴さん）

改めて公演映像を見ると、観客の皆さんに助けられたな、という印象です。あの場でのマジック採用など、とにかく、海外から来られた60名を越す留学生・研修生が観客でしたから、あの方々の反応の良さに救われた気がします。

先日、スーパー歌舞伎「ワンピース」を見てきました。伝統芸能を現代の芸能に絡ませて、より一般の方に広く歌舞伎を知ってもらおうという試みが大いにあふれていました。劇中では、古典の部分も多く描かれていました。

古典をしっかりやるから新作神楽は引き立つ。新作神楽ばかりやっては、本質が理解されないまま、誤解のみが広まってしまうと日舞の玉川師匠がおっしゃっていましたが、その通りだと感じました。この新作神楽は、まだまだそういった意味では十分に古典寄りですし、もっと現代のものを取り入れられることは、多分ですが、できると思います。でも、これくらいにしておいた方が神楽の奥ゆかしさは残る気がします。

神楽舞台で、歌謡曲の採用したわけですが、面白かったとおっしゃってくださる方ばかり。さてこれからどうしようか、どういう風に熟成させるか、どの方向性にもっていこうか、よくよく練り上げる必要がありますね。

一番大変だったのは、台本を作ったことよりも、稽古したことよりも、社中の皆さんにこの演目の意図を理解してもらうことでした。新作神楽、あまりにも突拍子すぎて、思考が追いつかないと指摘されたこともあります。座員の皆さんにしてみれば、ただ稽古をやらされている感が否めない部分もありましたね。演者が演目の意図や役柄をよくよくかみ砕く必要性が、新作神楽の場合は

あります。そう感じました。

回答02（加藤美津枝さん）

私は、新作神楽にあっては、「歌謡曲の挿入」が一番驚きました。「新作神楽」だからこういうのも、ありなんだなあと思い、きっとお客様にも喜んで頂けると感じていました。「古典落語」だけでなく、「新作落語」があるように、「新作神楽」を作りあげていくことも、垣澤社中の将来に生きていくのではないのでしょうか。私は、黒衣でしたが、炎に見立てた赤い布の扱いがうまく出来ず、苦労しました。今回の公演では、垣澤瑞貴さんが監督も、演出も、登場人物も兼ねましたが、出演者が舞台監督を勤めるのではなく、別に監督が欲しかったです。そうすれば、場面展開や小道具の扱い、登場人物の動きなどを冷静に指示していただけたのではないのでしょうか。それから、手品の要素をいくつか取り入れたことも「新作神楽」ならでは！プロポーズの場面、受けていましたよねえ！

回答03（塩川一美さん）

伝統芸能は、単純、素朴、音楽も笛、太鼓、所作も寂、静、乱、荒でしょうか。新作の場合は、ありとあらゆる分野にまたがり、発想も豊かに夢が沸いてきます。今日の情報システムからして（古典+アニメ+グラフィック）でしょうか。スーパー歌舞伎のように新システムを取り入れ融合した神楽もこれから発展していくと思います。

回答04（信太龍也さん）

古事記という題材は決まっている。出てくる役も決まっている。神楽のハード面は、以外に多い。お客様も見ていて楽しめるもの、変えることができる唯一の箇所は、演出しかないと考えています。

今回の作品は、ある意味、奇襲的な作品です。みずらをつけたり、歌謡曲を挿入したり。観ている側にとっては、いままでの空気感をがらりと変わる、そんなインパクトを味わっていただいたかと思っています。ただし、インパクトが強いが故に飽きやすい、次のハードルが高くなったと同時に考えています。新作に限ることではありませんが、観ている側の喜怒哀楽をいかに刺激できるかが重要であると考えます。観ている人がいるなら、何を与えられたのか。面白かったのか、退屈だったのか。泣けたのか、笑えたのか。引き込まれているのか、遠巻きか。同じ演目なのに拍手の有無の差はどこに原因があるのか。自己診断というよりも、「プロファイリング」に近い分析が重要な気がしています。

新作の将来性は、根国試練に限らず、別の題材でも大いに将来性はあります。観て感情を揺さぶることができると思います。

回答05（臼井良子さん）

古典芸能も少しずつ時代と共に変えていくことも必要だと思います。よく歌舞伎を見に行きますが、新作や演出の変化があります。神楽も新しい試みをしていくことが必要だと思います。

今回の「根国試練」は、ストーリーは知っていましたが、家元の娘・瑞貴さんが演出を考え、なるほど神楽ではこう出来るのかと思いました。私自身は、蛇やムカデのついた布をかぶせることと、炎をやる事でしたが、タイミングが悪かったので何度も練習してきました。

私たちは舞台上でやる事が少ないので、どうやったら観客が観てくれるのかまではあまり考えてきませんでした。しかし、今回、お金を払って観て下さる方の為には、演技手は観客が喜んで下さる事も頭に入れる必要があると思いました。さらに、劇場の照明さん、舞台係さんにもお世話になったことも忘れません。

回答06（垣澤勉さん）

芸能は生き物です。本質さえ外さないでいれば、新作、創作、パロディー化もありと思っていました。

新作神楽「根国試練」ですが、これは全くシナリオがなく日本初の試みです。今回の新作神楽と新作面芝居のシナリオ作成と演技構成から演出の全ては、娘の瑞貴に託し配役もお任せしました。父親役の須佐之男命を私が務め、その娘役である須勢理姫は長女・瑞貴、大穴牟知命は瑞貴の夫である龍也さんで実際の親子とその夫で演技した訳です。娘夫婦は共稼ぎです。互いに生活時間が異なる中、シナリオ作成を含め、互いの稽古は深夜時間に及び、寝る間も削っての創作と稽古だったと思います。正に大きな試練を娘夫婦に与えていたのかと思っています。その苦労を考えると複雑な心境で演技をしました。

通常、新作となると何年も掛かるのが常識です。ですが今回は短期間で仕上げなければ間に合いません。本当に大きな賭でしたが神楽業界（神楽師仲間）へのカンフル剤となり、未来に繋げる意味からすれば大きな挑戦でしたがやって良かったです。他の神楽団体からの反響も是非聞きたいところです。

それと演出の中でマジックや音楽も導入しました。これも初の試みでした。正直言って、どの様な反応があるか不安でしたが、驚きや笑いを誘い楽しんで

くれた観客の姿があり、大変救われた感じを受け、苦労して挑戦した甲斐がありました。

今後、この新作神楽が垣澤社中の一つの定番になることは嬉しいのですが、新作神楽をやる以前にやるのが沢山ある様な気がしました。先人の積み重ねてきた神楽芸の確立とスキルアップを図り、次世代に継承する事を改めて考えさせられました。最後に、新作面芝居の将来性に就いては未知数です。面芝居は、神楽師が神楽殿を守るため、苦し紛れに試行錯誤して生まれた芸能ですが、現在では大変貴重な芸能になっています。

＊コメント

新作神楽も新作に目を奪われるだけじゃいけません。しっかり神楽として成立していたことが重要なのです。古事記を読んで、神楽化されていないテーマを発見して、神楽仕立てにして、来場者にご提供。私は、チャレンジ精神に深く敬意を払うと同時に、日暮里の神楽を思い浮かべておりました。懐かしい思い出です。

【設問05】

9月9日の公演が終わった後、私は愛甲石田駅に再び戻って行きました。秋の熊野神社、雨降る中の祭礼でした。私は、いくつかの神社で垣澤社中の里神楽を見続けていたとき、この里神楽をさいたま芸術劇場へ持ち込んだときどうなるか。そんなことばかり考えていました。

公演が終わって、厚木市愛甲の熊野神社に向かったときは、いつもの垣澤社中らしい神楽奉納であることを期待していました。あの大きな神楽公演に挑戦していただいた後、得たものもあっただろうし、もしかしたら、失ってしまったものがあるかもしれない。と考えました。少しドキドキ気分でした。

回答01（垣澤瑞貴さん）

場所が違えば里神楽のやり方は変わります。常にお客様のニーズにあったものを意識することがとても大事だと、江戸の神楽を教えていただいた高見進師匠から教わりました。

さいたま公演で得たもの、それは垣澤社中が垣澤社中らしく存続している、そのことの貴重さ、でした。こんなに一致団結して舞台に立てる神楽集団は、神楽社中にあっては、もうなかなかいないのではないかと、とも思いました。感謝の気持ちが後になれば、なるほど湧いてきました。

継承について。それは「やらされている」という気持ちでは決して次の世代

にバトンタッチ出来ないということを感じたし、この空間、つまり祭り、神社、地域の人たち、私たちの神楽、祭り囃子、応援してくださるといった方々をひっくるめて愛していける人たちでしか、なしえないことだと思っています。

今の垣澤社中の座員さんは、皆さん父（家元）を慕っています。それが手に取るように分かります。だからこの公演が出来上がったのは父である家元の人徳ゆえだと確信しています。

私の考えですが、里神楽の継承は現実的にこれで生活出来るものにはなっていないので、力尽きて消滅すると思います。神楽がハッピーとなるためには、絶対ビジネスとしての成功が不可欠、そう確信しています。相模の里神楽の演目を選び、魅力を最大限にアピール出来たと思っています。さいたま芸術劇場でのご来場者のありがたい反響、これからの地道な継続活動に繋がっていくと思います。地道は活動を続けていくことのスタートみたいなものです。時間をかけてでも辛抱し、粘り強く演じ続けること、相模の神楽をいつまでも輝きあるものにしていくための必要な心構えだと思いました。

回答02（加藤美津枝さん）

未熟者ですので、「確実に得たもの」は、はっきりしません。9月9日のさいたま芸術劇場神楽公演では、ただ「一生懸命に」「落ちがないように」と夢中でした。この夢中であることが、神楽の継承につながっていくのではないかと思いました。オールマイティーを求める事も大切かと思いますが、なかなか難しいです。「広く浅く」ではなく、「より深く」を求めることも大切ではないかと感じました。

あの公演は、やはり。やってよかったと思いました。もちろん、あれだけの公演をすることは、どれほど大変なことかも分かりましたが、「社中を作り上げていく力」は、「一人ひとりの力の積み重ね」であることも再確認しました。

神楽の世界については分からないことばかりですが、公演をするに当たっては、「先を見通す力をつける」「意見交換の場を持つ」「和を大切にする」と言ったことが大切で、そうしたことが共通理解となることが、後継者育成にもつながっていくことと思いました。

回答03（塩川一美さん）

子どもの頃に見た村芝居の郷愁（日本人の心）がフツと湧き出したことで、

何故かホッとした気持ちになっていました。今回の公演にあっては、戸惑うこともありました。相模流里神楽の伝統をひたすら守り続けることも大切な使命ですが、色々な時代に沿ったものを取り入れ、今後の日本の伝統芸能のあるべき姿も変化すると思いました。

回答04（信太龍也さん）

この公演で得たもの、プレイヤー（演者）とディレクター（指揮者）の視点の違いです。それから、ロスを生み出さない段取りの重要性を感じました。垣澤社中の現状と、そして同時に限界点を知ることができました。また、お客さんが入場料を払って、ご来場ですから、料金を頂くことの重みを知りました。また、神楽の継承ですが、志を持った仲間が必要不可欠。伝統とは残っていくものではなく、努力して残していくものなのだと実感しました。まずは人ありきだと思いました。公演で伝えきれなかったものとしては、「祭りの中の神楽」という立場です。やはり原点は祭りのなかにあると改めて感じました。相模の地で生きる垣澤社中。社中が育まれた風土、テロワールを是非同時に体感して欲しかったです。この公演をきっかけに、ご来場された皆様の地元で何が残っているのか、なぜ残っているのか、考えるきっかけを伝えたかったです。

（編者註・テロワールという語彙は、フランス語。ワインを語るときによく用いられる語彙です。ワインの味は、ぶどう畑の土壌、気候に影響されることはもちろんですが、そこで働く人たちの気質、歴史なども含めて、いわゆる風土が詰まったもの、と理解されています。それぞれの土地柄を反映している地酒の味、そんな物いいがありますが、テロワールは、そのような意味合いだと理解してください。信太さんは、ワインのソムリエという仕事をされているので、この語彙を登場させた、と理解してください。）

回答05（垣澤勉さん）

相模流里神楽垣澤社中は、都心とは異なったローカルな場所で生きてきました。その土地の観客のニーズにあったものを意識して演ずることが大切なことだと私は思います。これからもこの姿勢は崩さず活動していきたいです。

さいたま公演で得たものは沢山あります。さいたま公演は、気力、体力、芸、社中の総合力を含めて大きな賭けであり挑戦でした。反省点は沢山ありましたが、やって見て相模の里神楽を見直すきっかけになり大変良かったです。何事も何かやらない事には先に進めません。

得たものの具体例としては、楽屋裏は別として、神楽社中のみの力で一致団

結し、一世一代の大きな舞台に立て、内容はともかく無事に成し得た偉業でした。それと準備段階から本番までの期間、多くのスタッフに支えられ公演が可能となったことを学び得たことです。特に、実行委員会の学生スタッフやシニアスタッフの中に、社中のメンバー（瑞貴）が積極的に関わっていったことにより、充分把握していたとは申しませんが、主催団体である委員会と私ども出演団体の一体感が図られていた、と思いました。

相模の里神楽を見直すきっかけには大いになりました。公演後、沢山の方々から感想文が寄せられていました。身に余る内容で感謝の言葉しかありませんが、このお言葉に甘んじることなく、日々精進し、相模流の良さや弱点を見強めていかなければならないと思いました。

神楽の継承について、何かお考えが生まれたのでしょうか、についてですが、観る方の興味がなくなったらその芸能は消滅してしまいます。その意味では里神楽の発祥地である東京（江戸）を通り越し、埼玉で公演したことに不安と戸惑いがありましたが、挑戦して良かったと思っています。そこで里神楽が注目され、刺激剤となって各社中の発展と神楽師の意識高揚と宣伝に繋がり、神楽の継承に繋がればと思っています。

あの劇場公演で見る方々に伝えきれなかったものは何でしょうか、の問いかけですが、献身的にお力添えを頂いた沢山のスタッフの方々へのご理解がどこまであったのかです。私を含め出演者は充分ではありませんが、理解している積もりです。が、一般の来場者には中々伝わっていないのかと思っています。せめて、あの神楽公演の姿をウェブ上で公開していただき、相模里神楽を広くお伝え願えればありがたいです。

*コメント

□神楽社中に大きな企画を渡すことによって、本来の神楽社中のテイストが破壊されないか、そんな質問を頂戴したことがあります。舞台公演と神社の神楽殿での神楽披露は意味合いが違う、という理屈です。さすがに元に戻る、その復原力は抜群。愛甲熊野神社（厚木市）での神楽奉納は、さいたま芸術劇場の舞台神楽とは違った魅力を放っていました。同じ神楽社中とは思えない、しっかり場を意識した神楽が奉納されていました。

【設問06】

公演解説プログラムについて、感想をお願いします。また、写真撮影成果、DVD制作成果についてもお願いします。

回答01（垣澤瑞貴さん）

プログラムの厚さ（160ページ）、公演関係者全員の熱意が反映していることは、誰が見ても明白に分かるものとなっています。本当にうれしいです。まだまだ質問していただき、そして書いて頂きたいことが沢山あり、相模里神楽の存在を皆さんにもっと知って頂きたい気持ちがあります。この公演解説プログラム（まさに本です）が、どんな経緯でどんな思いで作られたものなのか、もっともっと伝えたいです。私たち垣澤社中の営業ツールとして使いたいと思っています。営業できる環境をしっかりと作っていき、というのが当面の目標です。

DVDはシニアスタッフでありますイナヴォイスの葎谷昭さん達の努力が本当に良く分かる、と家元が申しておりました。力を込めて作ってくださり、デザインやレイアウトまでずっと細かく気にしてくださっていたことが、私の心に強く響いております。写真もいつも見事な成果を頂戴しています。公演準備から、公演当日まで、私たちの社中がご提供いただいた写真と動画によって、「相模里神楽資料館」になっていくことが実感できました。絵柄にせよプログラムにせよ、沢山の方々の支えがあつての里神楽であることを、強く、強く認識しました。社中だけの力では何も完成せず、これからの発展もなしえません。神楽がより認められて、大きくなるための知恵を皆さんと出し合って、それがパワーになって、一つずつステップアップしていくことが今後楽しみです。お力添え、本当にありがとうございました。これからはその御恩をお返し出来るよう、垣澤社中として結果を残していける力を付けていきたいと思ひます。

回答02（加藤美津枝さん）

立派なプログラム、ありがたい、一生の宝です。生きてきた証ができた感じですか。このような大切な時期に垣澤社中に名を連ねさせていただき、高見師匠とのご縁を頂いたことは、喜びに堪えません。お家元、垣澤 勉様、人として学ばせていただいたことがいっぱいでした。ありがとうございました。垣澤社中の更なるご発展をお祈り致します。

回答003（塩川一美さん）

重厚な冊子で情報内容も豊富、読み返すのが楽しみです。特に、家元の過去経歴は興味を持って読みました。また、面について、改めてその種類の多さにビックリです。DVDを観て感じるのは、家元は勿論、垣澤家のご家族の皆さんの芸の深さです。

回答004（信太龍也さん）

プログラムについては、客観的に観て、かなりのボリューム感があったと思います。プログラムは演目ごとの解説、見どころが丁寧に書いてあり、垣澤社中の「解体新書」という印象を受けました。将来的に見ても、大変重要なデータベースになり得ると思いました。公演 DVD については、観客目線でどのように見えているのか、演出はどうだったのか、動きに過不足はないのかななどを、いろいろな角度から観ることができました。改善点などを見つけることもできましたが、おおむね現社中のフルパワーを出せたと感じています。映像として残すことで、細かなニュアンスを後世に残すことができるので、大事にしていきたいです。撮影・編集してくださり、感謝の気持ちで一杯です。

回答05（中山敏男さん）

立派なものが出来、びっくりしました。すごいですね。

回答06（臼井良子さん）

プログラムを読んで大変丁寧に作って下さった事に感謝致します。個人的な内容まで載せて下さり、写真もよく残っていたのだと思いました。神楽の全てを知らせるのに役だったと思います。

回答07（垣澤勉さん）

プログラム、DVD、写真は前代未聞の厚さと内容に驚いています。特にプログラムは圧巻です。二度と刊行出来ない貴重な資料となりました。国立国会図書館まで寄贈して頂き大変名誉と思っています。感謝、感謝の気持ちで一杯です。

DVD は未熟不鍛錬な部分の反省材料として今後の参考資料となりました。いずれにしても沢山の時間と労力を費やし制作者の気持ちが込められたこのプログラムと DVD、そして記録は血と汗の結晶です。垣澤社中、いや垣澤家をはじめ、今公演に携わった出演者、そして、先人の神楽師達の宝物として後世に大切に伝えると共に、里神楽のアピールと普及宣伝活動の一貫として有効活用としていきたいと思っています。最後に、本公演に携わって頂いたシニアスタッフ、そして、多くの学生スタッフの皆さんひとり一人に十分な御礼のご挨拶もせず公演当日お別れしたこと、心からお詫び申し上げます。

ボランティア活動とは申しながら斉藤修平先生をはじめ献身的にご尽力下さった方々に御恩返し出来るよう、今後の活動を展開していきたいと思っています。どうぞ末永く暖かい目で見守っていて下さい。ありがとうございました。

＊コメント

公演解説プログラムは、実行委員会の「売り」の一つ。また、舞台写真、事前調査で撮影した神楽写真も「売り」、そして神楽 DVD もその完成度からして、これも「売り」。つまり、公演を支える資料づくりは私たち実行委員会の目玉と思っています。第九回公演では、学生スタッフがプログラムの中に活字での足跡を残していないので、そこが残念でした。ただ、素晴らしいプログラムの表紙デザインで、学生スタッフの力を発揮してもらったと思っています。

出演団体の方々が喜んでいただけるプログラムはコスト的には厳しいものがありますが、こうした感想をいただくことで、予算的な悩みも解消していきます。

おわりに

ご出演された神楽団体（神楽社中、神楽保存会）からアンケートによる感想文を頂戴する企画、なんとかまとまりました。六つの質問を用意して思うところを記入してもらいました。設問もかなりザックリしたもので、記述しやすいような体裁でお願いしました。設問1は、ご来場者からは絶対に読み取ることができない、楽屋事情。設問2は、かなり詰め込んだ公演を企画した当事者である私たちが不安を感じていた公演当日の時間管理について。設問3は、あえて、企画サイドがお願いした、新作面芝居に取り組んでくださった演じ手のご苦勞と感想。設問4は、同様に、新作神楽を依頼した私たちの期待と、新作を依頼され、取り組み、舞台上で披露された神楽社中のご苦勞、感想。設問5は、主催側の不安を投影した内容、劇場公演によって得るものは「ある」と思ったがる私たちが勝手な設問を用意しました。設問6は、いささか誘導的な内容であったかなと思います。

極めて情緒的な設問で構成されたアンケートでした。○×的なご回答を求めなかったのが、記述に時間を割いていただいたことが想像されます。垣澤社中さんの「メンバーそれぞれの本音」が表明されており、設問の足らざるところをうまく斟酌していただいたようで、安堵しました。学ぶことが多いアンケート結果でした。「神楽」ファンが少しでも増えることを願いながらの公演開催でしたが、公演制作には難しい問題群が横たわっている、改めてそんなことを思ったしだいです。アンケートにご協力をいただきましたこと、感謝申し上げます。

（文責・構成 斎藤修平）

註

註01：実行委員会のウェブ、トップページに「新着情報」という枠があります。

① 9月26日、②10月9日、③10月24日、④11月12日、⑤11月25日、⑥12月20日に公演感想文が私どものウェブ（新着情報）でアップされております。ご参照ください。公演への評価についてですが、アンケート結果も大切で、あれこれ考えていくヒントが詰まっています。

註02：平成七年七月に『神楽師仲間の符牒』という小さな、覚え書風のパンフレットが垣澤社中（家元・垣澤勉）さんから刊行されています。当主（勉さん）から伺うと、先代の家元から伝わってきた言葉を少し集めた、ということでした。神楽師に限らず、符牒や隠語の類いが特定の社会集団に伝承されてきたことはよく知られるところです。その隠語が一般社会に入ってきて、日常語になっている例も数多くあります。さて、早速にご紹介。神楽師の表現は（ ）内に紹介しました。参考例、子どものことを神楽師は（スクナヒコ）という符牒で呼んでいます。

1：年寄のことを（サマジイ）、2：息子（ワカヒコ）、3：娘（シタテル、ウズメ）、4：中年の男（ナカジク、シュヤク、カキダシ）、5：高慢な男（サルタ）、6：品のよい年寄（オキナ、フケ）、7：無口な人（ジンダイモノ）、8：お調子者（オテンキヤロー、インバ）、9：一般のおやじ（モドキ）、10：一般の女房（テンタ）、11：旦那様（ミコトサマ）、12：気の強い女（テンシヨウ、シコメ）、13：神楽の舞人（トウスケ）、14：笛吹き（トンビ）、15：神代神楽（ジン）、16：御神酒（モンタ）、17：酒飲み（モンタメー）、18：食事（テンコ）、19：口をきくこと（ベシヤル、ベシヤ）、20：太鼓や大拍子（カワシ）、21：給金、奉仕料（タロ）、22：ご祝儀（シュー）、23：初穂料・出演料（オハツ）、24：雨の日（バレ、スイバレ）、25：お産（ウガヤ）、26：寝具（カブリ）、27：荷物運搬（サンザ、サンゼム）、28：お風呂（ユギシヨウ）、29：宿（ドヤ、ヤサ）、30：満足（ゾクマン）、31：不服（ヤイチ）、32：そば（ヌーデル）、33：赤飯（ダイコク、オギ）、34：寿司（ヤスケ）、35：漬物（モロノオ）、36：煮物（ハシガカリ）、37：白ご飯（ハクテン）、38：神社（ミコト）、39：時間がない、急いで（ケンチ）など、神楽師の生活語を集めると、昔の神楽師の雰囲気なんとなく理解できるかもしれません。神楽師という職能集団が伝えてきた民俗語彙を東京、神奈川、埼玉でもっと探してみたいと思います。神楽囃子に関する音楽語彙、

所作や舞の稽古の中に登場する身体技法に関わる語彙など、興味が尽きません。